

<新館紹介>

獨協大学図書館

安 保 昇



写真1 図書館外観

1. はじめに

獨協大学は、外国語学部、国際教養学部、経済学部、法学部の4学部9学科、三つの大学院研究科および法科大学院からなる総合大学で、キャンパスは埼玉県草加市の1箇所にすべて所在している。学生数は、約9,000名である。

獨協大学創立40周年記念事業として、またキャンパス再編計画の第一歩として、本学の教学施設の核となる天野貞祐記念館（以下、天野記念館と略す）が2007年4月にオープンした。それからおよそ半年後の9月18日に天野記念館内に新図書館が開館した。新図書館自体も施設・設備・運用等にいろいろな特徴を持っているが、天野記念館という複合施設の構想や学内関連機関との連携については重要な意味があるので、その点も含めて紹介する。

2. 天野記念館および新図書館建設の経緯

旧図書館は、1968年に独立棟として建設され、学部図書室や分館などは作らず、学習図書館と研究図書館の機能を兼ねた1キャンパス1図書館の効率のよい集中管理方式をとっていた。しかしながら、時

代の変化とともに建物の老朽化だけでなく、狭隘化の問題、学術資源の形態変化への対応、利用者サービスや学習・教育・研究活動支援の拡充など、取り組まなければならない課題が増える一方、建物の構造上の制約などがあり、部分的な増改築や設備の入れ替えなどでは、これらの課題への対応は難しいという状況になっていた。

そのため、図書館では、書架狭隘化の対策、利用者用サービススペースや開架書の拡充、電子図書館機能の整備などを織り込んだ新図書館建設の要望を大学に出し続けていた。

一方、学内においては、教育・研究支援体制整備として学内LANが整備されることになり、1996年に学術・教育情報システム検討委員会が設置され、学内LANをいかに教育・研究に有効に生かすかということが検討された。その結果、「図書館」「外国語教育研究所」「情報センター」3機関の組織統合による「メディアセンター」構想について検討すべきという内容が答申に盛り込まれた。その後、さまざまな委員会においても3機関連携が提起され、キャンパス施設再構築計画および創立40周年記念

事業の一環として建設経費を予算に計上することが提案された。さらに検討を重ねた結果、「総合学術情報センター（仮称）」構想となっていく。

急速な情報処理技術の発達、学術情報のデジタル化の進展、インターネットの発達などに対して最新の取組み状況を把握するため、国内はもとより、米国、マレーシア、シンガポールの大学や図書館の施設設備や運用体制の調査を行った。国内の大学においては、既に多くの学術情報関連施設が作られていたが、単に従来の大学図書館と情報処理施設の複合施設に留まっており、両施設が連携して相乗的な効果を発揮しきれていないケースが多く見受けられた。

米国では、ラトガース大学アレキサンダー図書館、コロンビア大学ロースクール図書館、カリフォルニア大学サンディエゴ校ガイゼル図書館およびパークレー校ドー図書館・モフィット図書館、サンフランシスコ公共図書館の調査を行ったが、施設設備だけでなく、利用者サービスのあり方、他機関や教員との協体制について非常に参考になる調査結果を得ることができた。

これらの調査結果も踏まえ、本学の学術情報関連施設の計画においては、単に大学図書館を電子図書館化したり、ハード中心のインフラ整備をしたりするのではなく、学習・教育・研究支援という面で、関連機関の機能融合や連携を図り、さらに相乗的な効果を発揮し、ハード・ソフトの両面において本学の学習・教育・研究支援の拠点となることを目指すことになった。

そのため、情報化環境整備のための「総合学術情報推進委員会」において、3機関作業部会を設置し、学習・教育・研究支援実現のために図書館・外国語教育研究所・情報センターの機能融合により、何ができるかの検討を重ねた。

そして、着々と総合学術情報センター構想が進められたが、その一方、キャンパス再編計画により新教室棟の建設も同時に行うこととなり、さまざまな検討の結果、総合学術情報センターと教室棟の両施設が天野記念館に集約されることになった。

3. 天野記念館の概要

元・文部大臣で、本学の建学者である天野貞祐初代学長の名を冠した本学最大の教学施設「天野記念館」の建設は、先に述べたように創立40周年記念事業であり、またキャンパス再編計画のひとつでもあるが、本来の目的は本学の学習・教育・研究支援の拠点を形成することにあった。

この天野記念館は、全長167m、地上5階建て、

延べ床面積約3万平方メートルという巨大な複合施設で、おおきくは三つのゾーンに分けることができる。東側は、1階に国際交流センター、キャリアセンター、保健センター、カウンセリングセンター、カフェの学生サービスゾーンに加えて、獨協歴史ギャラリーがある。そして2階から5階は最新のマルチメディア機器を完備したCAL（Computer Assisted Learning）教室や大講堂などの教室ゾーンとなっている。中央には、教育支援室・情報センター、MM（Multi Media）工房、MM工房スタジオ、そして英語、ドイツ語、フランス語のコミュニケーションゾーンと多言語・多文化交流ゾーンからなるICZ（International Communication Zone）になっている。そして西側に図書館がある。

4. 設計のプロセスと図書館の基本コンセプト

天野記念館建設の業者選定や設計にあたっては、現学長・副学長の意向に基づき、トップダウン方式で決めるのではなく、現場で蓄積されたノウハウを活かすため、現場の意見を反映できるような方法で進めることになった。

そのため、教職員30名以上で構成される建設実行委員会・作業部会の委員が、設計業者および施工業者の選定を行った。設計業者の選定はプロポーザル方式、施工業者の選定は技術提案総合評価方式で行い、それぞれ数社に絞り込んだ。各業者のプレゼンテーションの後、委員が採点し、設計業者と施工業者を決定した。

また、作業プロジェクトを設置し、設計のベースとなる「総合学術情報センター（仮称）基本計画書」を策定した。それを基に設計業者が設計案を作成し、各ワーキンググループ（以下WGという）で検討を行っていった。WGは、設計会社、関連部署、各WGを統括する班（教職員で構成）で構成されていた。図書館関連のWGには図書館から7名参加し、設計会社の案を図書館に持ち帰って検討し、その結果をまたWGで検討するということを繰り返した。

建築時においても、そのWGに施工業者が加わり、同様の作業を繰り返した。

図書館では、早い時期にかなり詳細な新館仕様要望案を作っており、設計業者や統括班に提示していた。そのうちの主な基本コンセプトは、以下の通りである。

1. 学術資料の保存機関としての図書館
2. 電子図書館機能を有するメディアミックス型図書館
3. 自律学習、教育・研究支援を重視した図書館
4. 設計重視ではなく、快適で使いやすく、長時間

滞在型の図書館

5. 施設設備があるだけの図書館ではなく、人的サービスがあり、協働で何かをする場である図書館

また、新図書館のイメージや基本機能として、以下のようなことも要望した。

- ・アカデミックな雰囲気と公共図書館の親しみやすさの両面を持たせること
- ・落ち着きと開放感の両方に配慮した空間であること
- ・大学図書館にありがちな冷たい感じ、閉塞感のないものにする
- ・学内における学生の動線上にあること（特に教室からの動線を配慮する）
- ・低層で利用者が気軽に立ち寄り、滞在しやすく居心地の良い図書館であること
- ・資料、カウンター、施設・設備等利用しやすく配置されていること
- ・多様な職種のスタッフにとって、それぞれ働きやすく、サービスしやすい施設であること
- ・将来の学内外環境変化に対応できるよう、融通性、互換性を備えた施設であること
- ・防災、防犯対策に十分配慮した安全性の高い施設であること
- ・利用者が安心して利用できるセキュリティシステムを導入すること
- ・安全で分りやすい避難動線に配慮すること
- ・省エネルギー等環境への配慮をすること

5. 移転計画

本来、天野記念館内の各機関が同時にオープンすることが望ましかったが、半年遅らせて図書館を開館させたのは、資料劣化の要因となる湿気が多い新築の建物をできるだけ乾燥させるためであった。図書館側から強く要望を出した結果、大学の理解が得られ、図書館開館時期の変更が認められた。

資料移転、事務室移転、サーバ移転、データの整備など移設準備作業は膨大なものになったが、幸いなことに開館時期が予定より遅くなり、蔵書78万冊から開架書架に並べる38万冊を選定する作業や主題別サービスを前提にした資料配置などの計画を開館時になんとか間に合わせる事ができた。

また、新しい施設・設備やサービス内容にあわせ、利用細則や内規等を新しく制定し、新サービスの運用の準備作業を行った。

7月25日の旧館閉館から9月18日の新館開館まで、移転作業で図書館が利用できなくなるため、7月初旬から長期貸出や貸出冊数を増やす臨時措置を

取った。また、閉館期間中は他部署のスペースを借り、ILLのサービスを行った。

6. 新図書館の概要

(天野記念館全体)

建築面積 : 7,309.4 m²
延床面積 : 29,422 m²

(図書館部分)

延床面積 : 11,555 m² (旧館 : 8,092 m²)
内サービススペース : 7,811 m² (旧館 : 2,860 m²)
階数 : 4階建(4階は自動書庫,閉架書庫)
設計 : NTTファシリティーズ
施工 : 清水建設
閲覧座席数 : 1,130席
収容可能冊数 : 約143万冊

(内訳)

開架書架 : 約38万冊
自動書庫 : 約100万冊 (一期工事55万冊)
閉架書庫 (大型本用集密書架) : 約2万冊
貴重書室 : 約3万冊
蔵書冊数 : 約78万冊
雑誌種数 : 約1万2千種 (継続雑誌3千種)
開館時間 : 平日8:45 - 22:00
(授業期間) 土曜8:45 - 20:00

7. 新図書館の特徴

天野記念館全体の特徴になるが、環境対策として省エネなどの取り組みがあげられる。例えば、太陽光発電、外気エネルギー制御、熱センサーによる照明点滅制御、昼光を利用した照明制御、適正照度維持などのシステムを導入している。また、屋上や壁面の緑化なども行っている。

さて、新図書館の主な特徴として以下の点があげられる。

(地震対策)

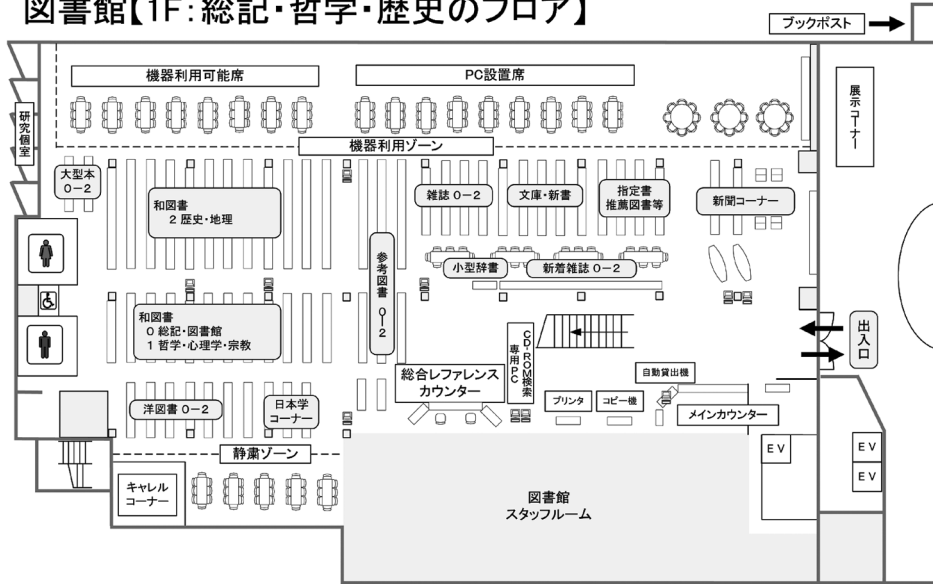
図書館部分は、資料保存と利用者の安全確保のため免震構造となっている。阪神淡路大震災級の横揺れや新潟県中越地震級の縦揺れを再現した実験を行い、その有効性を確認して、導入を決定した。

また、書架はフロアから1段分埋め込み、コンクリート床にアンカーで打ちつけている。書架の棚板についても実験により、地震時に資料が落下しづらく、かつ利用しやすいように棚板の傾斜角度を決めている。

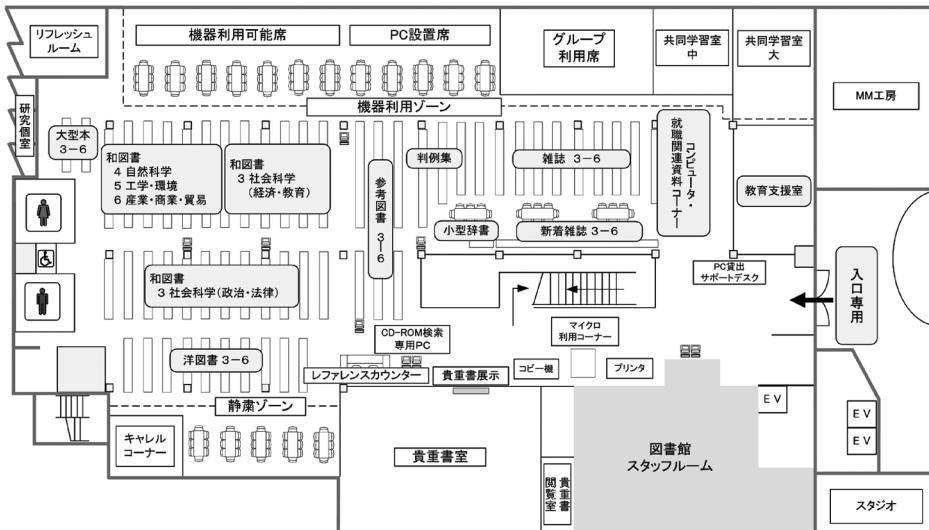
(動線)

1階から3階まで各階に入口を設け、授業の前後に立ち寄りやすくした。また、その3ヶ所の入館ゲートには、リアルタイムに管理運用できる入館シ

図書館【1F:総記・哲学・歴史のフロア】



図書館【2F:社会科学・自然科学・工学・産業のフロア】



図書館【3F:芸術・言語・語学・文学のフロア】

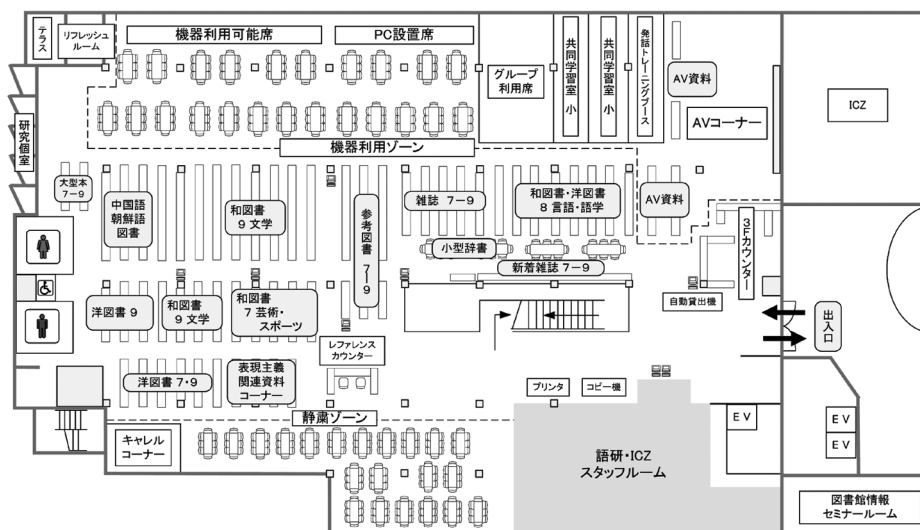


図 フロアマップ (1F~3F)

システムを導入している。

各階の資料・閲覧席・カウンター・複写機・プリンタなど施設設備の位置をほぼ共通にし、わかりやすい配置にした。

(閲覧席等)

静かな環境で利用する場合とPCや電卓などの機器を使用しながら利用する場合など異なる利用スタイルが共存できるように、閲覧席を南側の静粛ゾーンと北側の機器利用ゾーンに明確に区分けした。

また、窓に面した1人用の席をはじめとして、机やイスなどさまざまなタイプのものを用意し、多様化する利用者がそれぞれのシチュエーションにあわせて選択できるようにしている。

静粛ゾーンには、一般の静粛席のほか個室感覚で利用できるキャレルコーナーも設置している。

機器利用ゾーンには、ノートPCを設置した机と持込PCや貸出PCなどの機器利用が可能な机があり、どちらも資料などを広げながらPCを使える広めの机を用意している。



写真2 機器利用可能席



写真3 PC設置席

西側奥には集中して研究ができる研究個室を13室設けており、教職員だけでなく、院生や学部生も利用可能にしている。

2・3階には相談しながら学習ができるグループ利用席のほか、AV機器が設置されている共同学習室が、大(20席)×1、中(16席)×1、小(12席)×2の計4室ある。

静粛ゾーン以外には、無線LANにより学内ネットワークの利用が可能になっている。また、携帯電話も通話以外は利用を認めている。



写真4 グループ利用席



写真5 共同学習室(中)

3階には、AVコーナー、発話トレーニングブース、図書館情報セミナールームがある。

AVコーナーは、外国語教育研究所AVライブラリーと図書館の資料をあわせて利用に供するもので、ビデオテープ、DVD、LD、CDなどのソフトのほかCNNなどの海外放送も視聴できる。



写真6 AVコーナー

発話トレーニングブースでは、CD、CD-ROM、DVD、LAN環境で使用する英語学習システム「アルクネットアカデミー」やインターネット上の教材などを使って発話練習を行うことができる。語学分野の図書やCDをこのブースの近くに配置し、利用の便を図っている。また、同じ3階のフロアにあるICZとの連携も考えた配置となっている。

図書館情報セミナールームは、図書館が力を入れている情報リテラシー教育を行うための部屋で、利用者用PC60台、AV機器、サラウンド音響システム、IT活用教育支援システムなど最新の設備が設置されている。一部司書課程などの授業でも使用されるが、空いている時間には学生等が共同学習室のひとつとして利用できるようにしている。



写真7 発話トレーニングブース



写真8 図書館情報セミナールーム

(資料配置とカウンター)

蔵書約78万冊は、1階から3階の開架書架に約38万冊、残りは2階貴重書室、大型資料用の4階閉架書庫および4階の自動書庫に収められている。

開架資料は、主題別に各フロアに置き、入口に近いほうから、雑誌、参考図書、図書の順に配置している。雑誌は、継続中の約3,000タイトルすべてを開架にしている。主な新着雑誌を階段沿いの雑誌展示架に置き、それ以外の新着雑誌とバックナンバーを隣接した開架書架に原則3年分置いている。言語分野以外は、図書、雑誌とも和書と洋書に分けて配置している。

また、利用者に使いやすさと興味を持たせる意図から、各種コレクションやコーナーを拡充した資料配置を行った。

1階は、メインカウンターと総合レファレンスカウンターがあり、総記、哲学、歴史のフロアとしている。その分野の図書、雑誌、参考図書のほか、新聞コーナーには、当日の新聞から約4ヶ月分の原紙、5年分の縮刷版を、また文庫・新書コーナーには、和洋合わせて21種類の文庫・新書を配置している。

洋図書の一部に日本学コーナーを設け、日本について書かれた資料を言語ごとに主題分けして揃えている。

2階は、社会科学、自然科学、工学、産業のフロアになり、その分野の資料および資料相談等に対応するレファレンスカウンターを設置している。

コンピュータ関連資料コーナーには、NDC(7版)の分類では離れて置かれることになるソフトウェアやインターネットなどのコンピュータ関連の資料をひとまとめにして置いている。また、就職活動に役立つ資料をまとめたコーナーも用意している。

3階は、芸術、言語、文学のフロアで、その分野の資料および資料相談等に対応するレファレンスカ

ウンターを設置している。また、3階にも貸出・返却・利用手続きのカウンターがある。隣接するAVコーナーの運用・管理も行っている。

資料配置としては、言語分野の資料だけは、和図書・洋図書、CDを一緒に配架している。本学所蔵の特別コレクション「ドイツ表現主義文庫」に関連した表現主義関連資料コーナーや全ての分野にわたる中国語・韓国語の原書コーナーも設置している。



写真9 総合レファレンスカウンター



写真10 開架書架

(その他の施設・設備)

貴重書や特別コレクションなどの貴重な資料は、必要に応じて、脱酸処理や中性紙箱に入れるなどの保存処理を行っているが、さらに適切な資料保存ができるように温度・湿度の管理を行うことができる貴重書室を作った。また、貴重書閲覧室、貴重書展示コーナーも設けている。

PCは各階の機器利用ゾーンに合計で114台設置しており、学内ネットワークの利用が可能である。そのほかに蔵書検索専用PCとして21台設置している。

認証プリンタを11台設置しており、学生証等(ICカード)をかざすだけで、どのフロアのプリンタからでも利用者本人がプリント・アウト指示した

ものだけが出力される仕組みになっている。

リフレッシュルームやテラスでは、フタ付き飲み物を認めており、フタ付き飲み物だけを入れた自販機も設置している。

天野記念館内1階にはカフェがある。夜8時まで営業しており、夜遅くまで利用する図書館の利用者などが飲食できるようになっている。

8. 運営面での特徴

図書館建築計画と並行して、新図書館でのサービスのあり方と図書館専任職員減少の対策についても検討を重ねた。その結果、今後も図書館サービスの拡充を図るための方法として、閲覧系カウンターの業務委託を導入することにした。それは、安易に委託を導入するのではなく、専任職員をコアな業務に集中できるようにするというビジョンを明確にした上での導入である。準備として専任職員の業務の見直し、切り分けを1年間かけて行った。

現在は、各系の業務だけを中心に行うのではなく、専任職員全員が、選書業務、利用者教育のガイダンスを含むレファレンス業務もメインの業務とする体制をとっている。各フロアの主題に対応する3つの主題別選書グループを作り、その選書グループが3つの主題別レファレンスカウンターを担当するという体制にしている。

事務エリアの配置においては、1階の事務室は、メインカウンターの裏に閲覧系の事務室を、総合レファレンスカウンターの裏には参考系の事務室を設置し、カウンターをサポートしやすい設計にしている。

貴重書閲覧室は、隣の事務室との間にある壁を一部大きなガラス窓にし、効率のよい管理ができるような作りになっている。

セキュリティ面での管理対策として、貴重書室・貴重書閲覧室のほか、事務ゾーンと利用者ゾーンや外からの出入には、ICカードによる認証システムを導入している。また、入退館システム、防犯カメラの設置も行っている。

9. 3 機関連携

今まで述べてきた特徴以上に新図書館において重要な点は、他機関と連携し、従来以上のサービスを提供することである。

教育支援室(情報環境の活用を支援するための組織で、情報センター業務課の分室という位置づけにある)や情報センターとの連携であるが、図書館2階フロアに隣接して設置した教育支援室は、図書館内に「PC貸出・サポートデスク」という窓口を設

け、PCの貸出や機器の利用などに関する問合せに対応している。また、図書館内のPC、AV機器、プリンタ等のトラブルや修理・保守の対処を図書館と連携して行っている。情報センターのSEは天野記念館内（図書館や教育支援室）に常駐し、図書館のサーバやネットワークなどの管理・運用を行っている。図書館利用ガイダンスなどでは、情報センターのティーチング・アシスタントがサポートする。

外国語教育研究所との連携では、3階のAVコーナーや語学分野の開架書架に外国語教育研究所AVライブラリーの資料をあわせて配置し、図書館が管理・運用を行っている。今まで分散していた学内の資料が1ヶ所で利用でき、隣接するICZと行き来しながら、語学学習しやすい環境を提供している。

以上のような連携の構築にあたっては、3機関が連携して学習・教育・研究支援活動を行うという共通のコンセプトを持ち、議論に議論を重ねた。かなりの時間を要したが、その結果、セクショナリズムに陥ることなく、連携を前提にした設計が出来上がった。そして図書館という場で3機関が協働して、基盤整備や資料・機器等の提供を行い、サポートもするという体制を実現することができた。図書館だけでは難しいサービスを提供することが可能になっている。

10. 利用状況

インターネットの普及、自宅等からの図書館データベース利用、学内新施設設置による学生の動線の変化、駅前の市立図書館建設などいろいろな要因により、入館者数や貸出冊数が年々減少する傾向にあったが、昨年9月オープン以来、授業期間の入館者は前年度と比べて7割増、昨年10月から今年3月までの半年間で10万人以上の増加となっている。貸出冊数は、4割増であった。

また、長時間在館する傾向にあり、1月の在館者の平均は、20時には約150名、閉館20分前（21時40分）でも約80名の在館者がいる状況であった。

今年度新学期に入った4月には、オリエンテーションの充実を図り、またホームページのリニューアルやデジタルレファレンスなどの新サービスも開始した。その評価はこれからであるが、4月の入館者数は、前年同月と比べ倍以上に増えている。

順調に利用が増加しているが、想定外の利用のされ方や新たな要望が次々ときているので、今後さらにサービスの拡充をし、利用の増加につなげたいと

考えている。

11. 終わりに

建築・施設・設備などハード面において、最新の技術が取り入れられた新しい建物であれば、開館後数年間はそれなりに評価されるかもしれない。

しかし、本来の目的は、大学や図書館のミッションを達成できる図書館を作ることである。そのためには、実際にサービス運用を行っている図書館員（以下、館員と略す）の経験は重要である。それを設計に反映させることは、有効に機能する図書館を作るためには必要なことである。

今回の建築は複合施設の中の図書館ということで、予算や時間の制約、全体のコンセプトとの関係などから、図書館側の要望がすべて通って完成したわけではなく、現時点でも様々な問題点を抱えている。

それでも館員が設計から什器選定までのほぼすべての工程に関わった結果、図書館側の意見・要望が随所に反映されており、利用者から非常に高い評価を受けている。それは利用状況にも現れている。また、そのことが館員の高いモチベーションや責任感を生んでおり、館員は様々な問題やサービスの改善・拡充に意欲的に取り組んでいる。

最近では、あまり館員が関わることなく図書館が建設されることもあるようだが、図書館で働いている者が構想を含めた図書館建築に関わっていくことは、図書館の成長に欠かせない重要な要素であると実感している。

また、図書館部分の建築計画においては、図書館が中心になりながらも、学内の多くの部署の協力を得て、完成に至っている。そのことが図書館への関心や理解を生んでおり、学内における図書館の高評価につながっている。

開館してまだ半年しか過ぎておらず、まだ落ち着いた状況であるが、図書館単独の機能だけでなく、3機関の連携を充実させ、さらに国際交流センターやキャリアセンターなどとの新たな連携も積極的に図り、当初の目的である学習・教育・研究支援の拠点として、機能の拡充を行っていきたいと考えている。

<2008.6.3 受理 あんぼ のぼる 獨協大学情報センター次長>